The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ケニアのマサイ社会におけるFGMに関する研究 ージェンダーの視点を中心にー
Author(s)	林, 愛美
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69638
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名　　（ 林　愛美）	
論文題名	ケニアのマサイ社会におけるFGMに関する研究―ジェンダーの視点を中心に―

論文内容の要旨

本論文の目的は、東アフリカのケニア共和国（Republic of Kenya）に暮らす牧畜民マサイ（Maasai）の社会において、通過儀礼の一環として行われてきた女性の性器切除（Female Genital Mutilation、以下FGM）の変化について、その実態と女性たちの意見をフィールドワークおよび聞き取り調査から明らかにすることである。

マサイの社会では、通過儀礼として男女ともに性器に加工を施す慣習が行われてきた。しかしながら、女性の性器切除は心身に深刻な弊害を与えることが知られている。国際社会では1970年代後半からFGMの議論が高まり、2000年以降は段階的なFGMの軽減を含めた一切の切除を認めない「FGMのゼロ・トレランス」の方針が導入された。FGMは現在、廃絶すべき有害な慣習として国際的に認識されている。

ケニアの独立後、政府の定住化政策によってマサイの生業は専業牧畜から農牧へと移行した。出稼ぎ労働者の送金は村の現金経済化を促し、人びとの生活スタイルや文化は大きく変化した。女子の就学率は上昇し、キリスト教のミサや互助組合でイニシアティヴを発揮する女性も現れた。こうした社会変化に加えて、ケニアではFGM全面禁止法が成立し、FGM廃絶運動が地方の村落部にまで浸透している。

本論文では、フィールドワークおよび聞き取り調査から、社会とFGMを取り巻く変化に対し、マサイの女性たちがどのような対応をとり、またどのような認識を抱いているのかを研究した。インタビューデータは、全て筆者が現地調査で収集したものである。調査は2012年12月～2016年1月にかけて断続的に合計11か月間行った。調査地域は、ケニアのリフトヴァレー地域（Rift Valley）ナロク州（Narok County）ナロク北部地区（Narok North Constituency）の人口約1400名の集落である。本論文では、調査協力者のプライヴァシー保護のため、調査地の詳細な場所は示さない。

調査では、24名のマサイの成人女性にインタビューを行った。その結果、FGMは1959～2009年の50年余りで、女性たちの手によって様々に変えられてきたことが明らかになった。FGMの内容、施術道具、儀礼期間などに大きな変化が起きている。FGMは軽度な施術になり、施術道具はトタン製ナイフの使い回しをやめて医療用ナイフが使われるに至っている。また、麻酔薬の使用が普及し、FGMの痛みに耐えるという儀礼における意味づけは消失した。しかしながら、ケニアでFGM禁止法が成立し、FGM廃絶運動が村落部にまで浸透してからは、FGMは急速に地下化している。人びとは秘密裏にFGMを続けるべく、現在では成女儀礼に関わる一切の儀式を放棄している。

インタビューからは他にも、FGMの内容は世代だけではなく個人によっても異なることが明らかになった。先行研究では、同じ民族社会の女性は全員が単一のFGM経験を有するかのように描かれてきた。しかし、筆者の調査結果からは、FGMの経験も認識も個人の生育暦や両親の伝統に対する立場などによって異なることが明らかになった。

また、女性たちの語りにおけるFGMの説明装置を分析したところ、女性たちはFGMを文化でもあり、暴力でもあるという矛盾したものとして捉えていることが明らかになった。

最後に、FGMが廃絶に向かうとしたらどのような条件が必要かを考察した。重要な点は、FGMの決定を左右する社会的序列に変化を起こすことである。有効と考えられる手段は、年少女性が社会的地位を上げ、FGMの意志決定の場に関われるようになることである。しかし、財産を持たず、生産資源から構造的に遠ざけられている一般の女性たちにとってそれは容易ではない。そこで、少女の保護ネットワークを構築し、親への抑止力を持つに至った地元NGOの働きに着目した。調査では、地元NGOという外部の権威を利用して少女がFGMをめぐる意志決定に関わる事例が見られた。それ以外の手段としては、キリスト教や賃労働、教育など女性にも開かれた機会を利用し、全体としての女性の地位が上がることが期待できる。ただし、FGMの決定は家庭ごとに行われるため、女性の社会的地位が劇的に上がるのを待たなくとも、家庭内での権力関係、つまり家庭で女性の発言権が少し増すことによっても、何らかの変化が期待できるだろう。また、調査村の近隣では、FGMの慣習が既に失われている。そうした地域でFGMを受けずに民族社会に包摂された女性のロールモデルに接することは、少女たちのFGM認識に影響を与えることが予想される。FGM廃絶の条件に関する考察は、ジェンダーに基づく暴力廃絶のための議論にも広く適用できる可能性がある。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　林　愛美　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　言語文化研究科教授	竹村　景子
	副 査　言語文化研究科教授	高橋　美惠子
	副 査　言語文化研究科教授	米田　信子
	副 査　元宮城学院女子大学教授	富永　智津子
	副 査　大阪府立大学教授	宮脇　幸生

論文審査の結果の要旨

本論文は東アフリカのケニア共和国（Republic of Kenya）に暮らす牧畜民マサイ（Maasai）の社会において、通過儀礼の一環として行われてきた女性の性器切除（Female Genital Mutilation、以下FGM）についてその実態および廃絶運動の在り様を明らかにし、従来の文化人類学的研究では研究対象とされてこなかった「当事者である女性たちの行為主体性」について論じることを目的としたものである。

第1章では先行研究のレヴューが記述されている。FGMの先行研究としては、様々な言語で、また多岐にわたる視点からの膨大な蓄積があるが、本論文は地域研究のミクロな視点からの研究であることから、地域に根ざした研究である社会・文化人類学および地域研究の蓄積を土台にして書き進めることが示されている。また、本論文の目的の1つである「当事者である女性たちの行為主体性」を明らかにするために、ミクロ人類学における「エイジェント」の概念を援用することも明記されている。

第2章では、FGMに対する様々な介入について＜植民地期＞、＜ポスト植民地期＞、＜21世紀以降から現在＞に時代を分けてその流れが概観されている。特に＜21世紀以後から現在＞においては、FGM反対の根拠が身体への弊害から人権侵害という言説へとシフトし、FGMの完全廃絶を目指す「FGMのゼロ・トレランス」が国際社会での共通認識となったことが示されている。マサイの地域でも1990年代からマサイの女性主導によるFGM廃絶運動が開始され、コミュニティを動員した草の根的なFGM廃絶運動が展開されたことにも言及されている。地元NGOがローカル・コミュニティの有力者と協力して少女の救済ネットワークを構築する作業を通じて地域で強い影響力を手にしたことを明らかにしている。

第3章では、マサイの社会においてFGMがどのような文脈で行われているのかを理解するため、女性の社会的地位に着目した社会背景が記述されている。マサイの歴史や基本的な社会システムの記述部分については、多くの先行研究が援用されている。一方、男女の経済格差や教育格差、身体加工の変化および女性の通過儀礼については、林氏の現地調査結果をもとに記述されている。本章では、家父長的性質の極めて強いマサイの社会において、女性が生産資源へのアクセスから遠ざけられており、唯一の資源と言えるのが「出産」という再生産能力だけであることが示されている。このことから、女性は結婚して子どもを産まなければ社会的地位を確立できず、経済的生活が不可能であることが強調されている。そして、その出産の条件としてFGMが課されている点において、女性は切除を受けなければならない構造的状況に置かれてきたこと、またその文化的根拠としては、FGMを受けていない女性が産んだ子どもは不吉であったり、性器に肉が残っていると男好きになって結果的に流産したりするといった言説があることを明らかにしている。

第4章では、林氏が約11か月間をかけて調査地において24名のマサイの女性にインタビューした結果が提示されている。FGMは1959～2009年の50年余りで、女性たちの手によって様々に変えられてきており、FGMのタイプ、施術道具、儀礼的慣習、儀礼期間などに大きな変化が起きていることが詳述されている。さらに、ケニアでFGM禁止法が成立しFGM廃絶運動が村落部にまで浸透してからはFGMが

急速に地下化したことにも言及し、人びとが秘密裏にFGMを続けるべく、現在では成女儀礼に関わる一切の儀式を放棄していることも指摘している。本章ではまた、FGMの内容が年代だけではなく個人によっても異なることを明らかにしている。先行研究では、同じ民族社会の女性は全員が単一のFGM経験を有するかのように描かれてきたが、個人の成育歴が異なる以上、FGMの経験も多様であろうことは当然予想されたことであり、事実、林氏の調査結果からはFGMの経験も認識も個人によって異なることが示された。同時に、女性たちの語りからFGMの説明装置を分析し、女性たちがFGMを「文化でもあり暴力でもある」という矛盾した存在として捉えていること、および、FGMの決定をめぐる社会序列の中で最も最下層にいる少女たちが、FGMに対して「仲間内でのイニシエーション」という独自の意味合いを見いだし、解釈のレベルで身体に関する主権を取り戻そうと抗っていることも明らかにしている。

第5章では、ここまでの記述を踏まえて、FGMが廃絶に向かうための必要条件について考察されている。最も重要な点は、FGMの決定を左右する社会的序列に変化を起こすことであり、そのための有効な手段として少女たちが社会的地位を上げ、FGMの意思決定の場に関われるようになることであると指摘している。しかしながら、財産を持たず、生産資源から構造的に遠ざけられている一般の女性たちにとってそれは簡単なことではないため、外部アクターとしての地元NGOの動きが重要であることに言及している。すでに林氏の調査から、地元NGOが少女の保護ネットワークを構築し、親への抑止力を持つに至ったことが明らかにされており、この外部の権威を利用すれば少女がFGMをめぐる意思決定に関われる事例が確認されている。それ以外の手段として、キリスト教会関連の活動や賃労働、教育など女性にも開かれた機会を利用し、全体としての女性の地位を上げることが重要であることも言及されている。また、林氏の調査村の近隣では、FGMの慣習が既に失われた地域も存在しており、FGMを受けずとも民族社会に包摂されている少女たちのロールモデルに接した調査協力者の事例も挙げられていた。こうしたロールモデルに接することがFGMに対する女性たちの認識の変化に何らかの影響を与える上で重要であると締めくくられている。

本論文が先行研究と一線を画しているのは、現地調査において24人の女性たちに対して自身のFGMについての詳細なインタビューを行っていることである。FGMの問題は非常にセンシティブであり、同じ民族内でも議論の対象にすることは憚られることであるが、林氏は外国人として村に滞在しながら長い年月をかけて女性たちの信頼を得ることができ、女性たちのライフヒストリーを丁寧に聞き出すことに成功した。このミクロな視点による調査によって、これまでは画一的な説明しか与えられていなかったFGMの非常に詳しい実態を明らかにしたことで、本論文はアフリカ地域研究ならびにアフリカ牧畜民研究、さらにはフェミニズム研究に新たな視座を提供できたと思われる。また、FGM廃絶運動の実際についても、現地NGOに対するインタビューおよび参与観察等から詳しく分析し、その運動とFGMを実際に受けている女性たちの認識・主張とがどのように絡み合っていて、どのようにずれているのか、その交錯状況を丁寧に描き出したことも高く評価できる。

ただ、論文の構成に関しては、6章ある本論のうちのいくつかの章の順序を入れ替えた方がより論理的に読み進められたと思われる。また、本論文の目的の一つであった「女性の行為主体性を明らかにする」という点については、議論の章である第5章において十分に検討されたとは言い難い。マサイ社会におけるジェンダー規範とそれに対する女性たちのささやかな「抵抗」について表面的に言及されてはいるが、それが「女性の行為主体性」であると結論付けるには理論的根拠が乏しく、また、そもそも「行為主体性」がどのようなものであるかについての説明が林氏自身によって明確にはなされていなかった点から見て、明らかに議論が不足していたと言わざるを得ない。林氏が目指したところである、マサイのFGMの問題を通して「世界的に散見されるジェンダーを理由にした女性たちへの暴力」の構造を解き明かし、それらの廃絶に向けてのプロセスに貢献するという次元には、残念ながら到達し得なかったと判断せざるを得ないだろう。

しかしそれでもなお、先述のように本論文がアフリカにおけるFGM研究にとって新たな視点を与えたことについては疑いがなく、その点において博士論文としての価値が認められることから、審査委員会は「合格」の結論に達した。